

PROGRAM

バルトーク：ピアノ・ソナタ

ドビュッシー：「映像」第2集

バーバー：ピアノ・ソナタ 変ホ短調 作品26

ショパン：バラード第2番 ヘ長調 作品38

ショパン：4つのマズルカ 作品24

ショパン：子守歌 変ニ長調 作品57

ショパン：スケルツォ第3番 嬰ハ短調 作品39

インタビュアー 朝元 百

四季のコンサート 秋

1988年10月28日(金) 7:00 PM
浜松市民会館
主催：浜松音楽友の会

●会員登録はそのまま継続されます。退会希望の方は必ず、次のコンサートまでにお申出下さい。

を演奏するなど、現代作品の紹介にも力を入れている。オルソンの演奏で最初に気づく点は、その極めて美しい「音」である。かすかなピアノ・ソナタから巨大なフォルテ・ピアノまで、決して濁らず、しかも音楽的な表情に欠けることがない。さらに無類のテクニクに支えられた音楽は明快を保ち、こまやかで誠実である。

国際的な活躍を続けるうちに、オルソンはドイツ語、スペイン語、フランス語、イタリア語を流暢に話すようになり、スウェーデン語とポーランド語も片言ながら不自由しない。趣味はワグネルの研究で、東洋の美術と歴史、SF小説、心理学にも興味を持っている。オルソンはニューヨーク・マンハッタン・ソールの間のサイクリング・ツアーのベテランで、コンサートの前にはジョギングを取り入れて健康管理に努めている。

1948年生まれ。ニューヨーク州ホワイツレイノスで8歳からピアノを始め、13歳でジュリアード音楽院に入学。サツキ・コロドニツキとロジーン・レヴィンに師事。ハースタールでは数学に抜群の才能を示し、特別進級するほどだったが、オルソン自身は早くから自分の天職はコンサート・マスターにあると確信していた。1970年のショパン・コンクールでアメリカ人として初の、そして現在まで唯一人の優勝者となる。それ以前にも、1966年イタリヤのトリニ・コンクール、1968年カナダのモントリオール・ピアノ・コンクールに優勝している。

1970年以来、彼はレパートリーに270曲以上を加え、1986-87年シーズンだけでも、モーツァルト、ブラームス、ラヴェル、ラフマニノフ、バルトーク、リストの協奏曲のほか、ビュッシー賞受賞の作曲家チャールズ・ウオリネソのピアノ協奏曲第3番

ピアノ・ソナタ



ギャリック・オールソン

ピアノリサイタル

作品番号の付いていないピアノ・ソナタは、1926年バルトークが45才の時に作曲された。この1926年はバルトークにとって「ピアノの年」と言われており、彼の優れたピアノの為の作品が集中的に書かれた年である。ピアノは構造的には打楽器であるが、この作品では特にピアノの打楽器的な特徴が強調されている。つまり、美しく流れるような旋律はほとんどなく、不協和な和音が叩き鳴らされることが多い。このような打楽器的な扱いや騒音的な響きに音楽的な意味を認めるという姿勢は、いわゆる現代音楽の特徴の一つであり、それはドビュッシーの印象主義の音楽やシェーンベルク達の無調音楽の影響などによるものであると言われている。曲は3つの楽章から成り、第2楽章は重厚で奥深い音楽であるが、第1楽章と第3楽章は急速で躍動感にあふれており、作品全体としては力強い変化に富んだリズムと多様な音色の面白さが聴きどころとなっている。なお、特に第3楽章には、バルトーク特有の祖国ハンガリーの民族音楽的な特徴が目立っている。

ドビュッシー (1862~1918) 映像 第2集

《映像》第1集は1905年に、第2集は1907年に発表された。いずれの曲集も3曲から成り、詩的な曲名が付けられている。映像と音楽は全く別物であるはずだが、ドビュッシーの場合、詩的な曲名を仲立ちとして一体となっているように聴こえてしまう。第2集の第1曲「葉ずえを渡る鐘の音」では、こまやかに流れるように揺れ動く葉ずえの様子が描かれ、静かにエキゾチックに響く鐘の音が印象的である。第2曲「そして月は荒れた寺に沈む」では、曲のどの部分が寺を表し、どこが月の様子を暗示部分なのかよく分からないが、荒れた寺と沈んでいく月が目玉のあたりに浮かんでくる。実に神秘的なムードたっぷりの曲である。第3曲「金色の魚」では雰囲気が大きく変わる。シャープで華麗な動きがまぶしいほどの曲である。それは、日本のうるし塗りの器に描かれた金色の鯉の様子を表したものであると言われている。

バーバー (1910~1981) ピアノ・ソナタ 作品 26

バーバーは20世紀アメリカを代表する作曲家の一人である。しかし、彼の作風は保守的であり、古典的な形式や書法が用いられることが多い。時々はとつとつするような美しいメロディーが出て来るのも彼の音楽の特徴である。力強い生命力に満ちたピアノ・ソナタ作品26は1949年に作曲された。4つの楽章から成り、第1楽章アレグロ・エネルジコは技巧的なソナタ形式、第2楽章アレグロ・ヴィヴァーチェ・エ・レジーロは軽やかな舞曲形式、第3楽章アダージョ・メストはおおらかな歌謡形式、第4楽章アレグロ・コン・スピリトは古風なフーガ形式で書かれている。現代的な技法とロマン的な叙情性が、古典的な形式の中で神秘的に溶け合った不思議な魅力をたたえた作品である。

ショパン (1810~1849)

ポーランドの作曲家ショパンは、1831年にパリに出て、社交界の人気者となった。「4つのマズルカ」が書かれた1835年頃は、作曲家としてもピアニストとしてもショパンの名声が確立された時期であった。「バラード第2番」の作曲を始めた1836年に、彼は女流小説家ジョルジュ・サンドと出会っている。彼女はショパンを芸術家として敬愛していた。1838年二人はパリを離れ、マジョルカ島で生活を始めるが、肺結核に冒されていたショパンの病状が急に悪化してしまう。サンドの献身的な看護の甲斐があって、彼の健康は一時的に回復する。「バラード第2番」と「スケルツォ第3番」が完成した1839年は、マジョルカ島を去り、ジョルジュ邸で作曲に専念することが出来た年である。その後たくさんの傑作を生み出すが、「子守歌」を書いた1844年には父が亡くなり、サンドとの仲もうまくなり、再び病状が悪化する。そして5年後の1849年10月に39才の若さでこの世を去ってしまう。ショパンの1836年以降の作品は、サンドの世話がなかったら生まれなかっただろうと言われている。